

| | |
|---|-----|
| はしがき | 1 |
| 第一章 中世の北奥と南部氏の系譜 | 6 |
| 北奥の行政構造／二流に分かれた南部氏の系譜／蛸崎藏人陰謀事件と「新屋形」義純／政経に提出された一通の訴状／蛸崎藏人に自害を勧告／アイヌからの援軍／激戦となった蛸崎藏人討伐／窮民の救済策／蛸崎藏人討伐の恩賞／「田名部御陣日記」の虚実 | |
| 第二章 南部氏の台頭 | 53 |
| 八戸南部氏が急速に衰頹したのはなぜか／安東氏を蝦夷島に逐う／不安定だった津軽支配／秋田氏との抗争／浅水城の叛乱事件／戸沢氏を逐い岩手郡を支配下に／雫石地方を支配した戸沢氏／角館城主の戸沢氏／志和郡をめぐる斯波氏との争い／斯波氏を滅ぼし志和郡を掌握 | |
| 第三章 信直による南部藩の創設 | 85 |
| 信直暗殺未遂事件と家督継承時期の謎／南部家督をめぐる石川高信と九戸政実の争い／信直の継承を主導した北信愛と八戸政栄／南部藩の構成／ | |
| 「津軽斎藤系譜」にみる津軽の情勢／弘前に集結した葛西一族／石川高信の死と家中の分裂／大浦為信が津軽の領主として独立 | |
| 第四章 天下への道 | 114 |
| 緊迫する領内情勢／田中清六を通じて秀吉に贈り物を献上／前田利家の取りなし／小田原参陣を命じられる／参陣しなかった葛西晴信／率先して参陣した戸沢盛安・津軽為信／八戸直栄を伴い参陣／秀吉の奥羽平定に従軍／葛西・大崎一揆の蜂起／政宗謀叛の噂／中央軍の来援を待つ／九戸政実の叛乱／秀吉に助けを求める／秀次を総大将とする討伐軍／九戸城を包囲する／九戸氏の滅亡／なぜ政実は謀叛したのか―中世から近世への転換―／病身の信直に届いた朝鮮への出兵指令／名護屋への出陣と朝鮮情勢／朝鮮出兵を通して「日本」を自覚 | |
| 第五章 信直の内政 | 181 |
| 新たな居城不來方城の建設／秀吉の許可はいつ得られたのか／税制の統一を図る／新検地の施行／南部の経済を支えた金・鷹・馬／娘千代子への手紙にみる信直の人柄／秋田氏との和平通婚／病身であった晩年／信直の死／「古本」との決別／中世大名から近世大名へ | |
| あとがき | 237 |
| 229／南部信直年譜 | |
| 231／南部氏系図 | |
| 235／八戸南部氏系図 | |
| 236／南部藩境の伊達領域内諸城表 | |

第一章 中世の北奥と南部氏の系譜

北奥の行政構造

南部信直は南部家第二十六代で、南部家の中興の祖、そして近世南部藩の祖ということになっていく。支配した地域は現在の盛岡（当時不來方）から以北、青森県全体におよんでいる。この地域を本書では北奥と呼ぶことにする。この中に、南部家の始祖といわれる人の支配地（糠部）も津軽も含まれている。

糠部地方の支配者となった南部光行は鎌倉幕府の御家人であり、甲斐国南部庄の住人で、加賀美氏などと同族であった。光行は、『吾妻鏡』によると文治五年（一一八九）の奥州平泉の藤原泰衡討伐軍に参加しており、以来、頼朝の家人として各地で活動している。

南部家の後年の記録によると、光行が泰衡討伐の勲功によって糠部五郡をもらったと称しているが、確証はない。糠部は当時、郡であり、糠部五郡という表示はきわめて曖昧である。学者は五郡をいろいろ比定するけれども、表現そのものにすでに問題がある。糠部は牧場政策の立場から九つの部に分けられ、それを、一戸・二戸・三戸・四戸・五戸・六戸・七戸・八戸・九戸とし、一つの部に一つの牧場を設定した。それに牧士を配し、牧士に牧士田を支給したといわれているから、糠部郡の内五つ

の部を支給したと解すれば、当時の実情に合うようにも思われる。

ところで、糠部郡には津軽が含まれていなかったことは、これから話を進めるうえでたしかめておいたほうがよいと思う。建武二年（二三三五）の北畠顕家の国宣によると、

花押（北畠顕家）

陸奥国津軽、鼻和郡、絹家嶋、尻引郷、片野辺郷、糠部郡、宇曾利郷、中浜御牧湊以下 同西浜（除安藤次郎太郎後家賢戒知行分開阿曾米村）地頭代職の事

右、安藤五郎太郎高季の先例を守り、領掌せしむべきの状、仰せの所件の如し。

とあり、津軽と糠部を明瞭に区別している。この頃になると、津軽の中には四郡が成立しているのに対して、糠部の中には久慈郡（現在の久慈市）が成立しているだけである。

江刺・胆沢・気仙・磐井地方には郷の他に庄があり、元龜三年（一五七二）の伊達輝宗の安堵状には「上長井庄藤いつみ」などが見え、陸前高田市（旧気仙郡小友村）華藏寺所蔵の応永八年（二四〇一）八月十二日の寄進状には、磐井郡大原庄が見えている。ところが、岩手郡以北には庄という行政呼称は見えず、遠野に保がある程度で、他はすべて郷・村になっている。しかも、糠部と津軽とは行政区画が基本的に異なっている。同じ陸奥国でありながら、津軽は陸奥国の津軽として区画し、その中に平賀・鼻和・田舎・山辺の三郡があり、その下に郷があつて、さらにその下にいくつかの村ができていく。この構造は、出羽国秋田地方も同じようである。

しかし、糠部のほうは糠部郡と久慈郡の二つで、糠部郡にはその下に東西南北の四つの門があり、

行中に郡として昇華せず、門制も戸制も完成せずに近世社会に移行し、太閤検地たいこうけんちによって村を行政單位とするようになって、門制・戸制の中から開発の程度にしたがって、門制から北門が北郡となり、戸制からは三戸・九戸が郡となった。他は新郡制下に編入され、近世の郡制、すなわち、三戸・九戸・二戸・北の四郡の成立となったのである。

| | | | | | |
|-------|-----|----|---------|----|--|
| 正平十五年 | 〃 | 田舎 | 黒石 | | |
| 曆応四年 | 〃 | 〃 | 外浜・野尻 | | |
| 貞和三年 | 津軽 | 平賀 | 加土計 | | |
| 康平四年 | 陸奥 | 山辺 | 冬井・日野間・ | | |
| 〃 | 〃 | 田舎 | 柏木 | | |
| 興国六年 | 津賀路 | 〃 | 亀山 | | |
| 〃 | 〃 | 鼻和 | 安庶子 | | |
| 〃 | 〃 | 平賀 | 大浦 | | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 法師脇 | 沼楯 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 辺・尻引 | | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 絹家嶋・片野 | | |
| 建武二年 | 〃 | 鼻和 | 目谷 | | |
| 〃 | 〃 | 田舎 | 上冬居 | | |
| 〃 | 〃 | 山辺 | 二想志 | | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 上柏木 | | |

造ではないようである。このように同じ陸奥国にありながら、糠部と津軽とは著しく村落構造を異にしている。それは結局、中世における領主とその開発の差によるのではないかとみられる。

陸奥国は最初、津軽と糠部との二つに分かれた。津軽には四郡が成立したので、津軽という名称は、陸奥国と郡との中間的区域名となったのに対し、糠部のほうはその中に牧畜を大規模に行い、九つの部制を実施する。しかし、中世社会の進

表1 北奥地区郡郷村制表 岩手県中世文書

| 年号 | 地域 | 郡 | 門 | 郷 | 戸 | 村 |
|------|----|----|---|-----|----|--------|
| 建安元年 | 〃 | 〃 | | 岩楯 | | |
| 元弘三年 | 〃 | 糠部 | | 宇會利 | | |
| 建武元年 | 〃 | 〃 | 南 | | 七戸 | 中里 |
| 〃 | 〃 | 久慈 | | | 七戸 | 野辺地 |
| 〃 | 〃 | 〃 | | | 三戸 | 西浜・牧湊・ |
| 〃 | 〃 | 〃 | | | 八戸 | 岩楯 |
| 建武二年 | 〃 | 糠部 | | | 九戸 | 中湊・牧湊・ |
| 元弘三年 | 〃 | 糠部 | | | 三戸 | 西浜 |
| 〃 | 〃 | 〃 | | | 五戸 | 岩楯 |
| 〃 | 〃 | 〃 | | | 八戸 | 中野 |
| 〃 | 〃 | 〃 | | | 五戸 | 是河岩淵 |
| 〃 | 〃 | 〃 | | | 三戸 | 鯉崎 |
| 〃 | 〃 | 〃 | | | 三戸 | 鮭越 |
| 正安三年 | 〃 | 糠部 | 東 | | | 種市 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 西 | | | 中野 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 北 | | | 是河岩淵 |
| 〃 | 〃 | 〃 | | | | 鯉崎 |
| 〃 | 〃 | 〃 | | | | 鮭越 |
| 〃 | 〃 | 〃 | | | | 種市 |

その下に村があつて、それとは別に一戸から九戸までの部があり、さらにその下に村がある。また、戸とは別に郷があり、その下に村を配するものと混合している。

門——村、戸——村と郷——村との関係がどうなっているかは必ずしも明らかでない。門——村、戸——村が他地方の庄——村に相当するものかも、今のところはつきりしない。ただ、この地方には郷——村はあるが、庄——名は見えない。

吉田東伍博士は、この地方の行政区を郡——門——戸——村の構造とし、牧畜制度に由来した特殊な行政区としている。

しかし、中世社会の進行から見ると、門——村、戸——村、郷——村の三態が見られ、必ずしも、門——戸——村の構



南部光行の墓（右手前） 岩手県盛岡市・聖寿寺

のほか十八名が見えるが、南部家の直系には太郎と称する者はなく、祖光行以来、二郎あるいは三郎を通称としている。しいて捜すと、光行の庶子、長男行朝は太郎と称し、庶子のため別家をたてて糠部郡一戸を領したとあり、時代的には一致するが、どうだろうか。

『吾妻鏡』によると、承久三年（一二二二）五月と六月に官軍と對抗するため上洛した鎌倉軍の中に、奥羽在住の諸士が多く見える。「陸奥六郎有時、南條七郎、安東藤内左衛門尉、伊具太郎、横溝五郎、安藤左近将監、阿曾沼次郎親綱、成田五郎、奈良兵衛尉、曾我太郎、

にも、光行が討伐に参加したことは事実であるが、糠部をもらったかどうかは明らかでない。根本資料ではっきりしているのは、葛西清重が勲功の賞として奥羽総奉行となり、平泉に駐屯したこと、工藤小次郎行光が岩手郡をもらったことくらいである。

承久の乱（一二二二）の尾張の会戦に、北条軍として参加した御家人の中に、

小笠原次郎長清 父子八人
武田五郎信光 父子七人

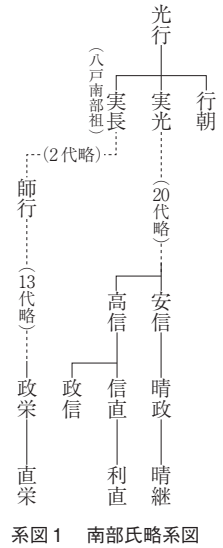
なこの太郎、河内太郎、二宮太郎、閉伊三郎、加賀美五郎、秋山太郎、兄弟三人、浅利太郎、

南部太郎、轟木次郎、逸見入道、小山左衛門尉

のほか十八名が見えるが、南部家の直系には太郎と称する者はなく、祖光行以来、二郎あるいは三郎を通称としている。しいて捜すと、光行の庶子、長男行朝は太郎と称し、庶子のため別家をたてて糠部郡一戸を領したとあり、時代的には一致するが、どうだろうか。

『吾妻鏡』によると、承久三年（一二二二）五月と六月に官軍と對抗するため上洛した鎌倉軍の中に、奥羽在住の諸士が多く見える。

「陸奥六郎有時、南條七郎、安東藤内左衛門尉、伊具太郎、横溝五郎、安藤左近将監、阿曾沼次郎親綱、成田五郎、奈良兵衛尉、曾我太郎、



二流に分かれた南部氏の系譜
同地を舞台として活躍する南部氏の正体は、まだあまりはつきりしていない。信直が活躍する時期には、二つの系統の南部氏がいた。南部家の総本家と称する光行の系統と、それから分派して吉野朝期に活躍した南部師行の系統である。

この二者は、室町末期までほとんど独立した領主権をもっていたが、後者は信直時代に南部総本家に併合されて一支藩となり、寛永四年（一六二七）に遠野に転封され、廃藩まで同地にいたので、人呼んでこれを遠野南部と称する。しかし、それは信直の子利直の時代のことで、信直時代には八戸を拠点として本家以上の勢力を張っていた時代があり、八戸南部と称していた。

そのため本書では、ただ南部といったときには後の盛岡南部（三戸を拠点としたので三戸南部ともいう）をさし、師行の系統の南部氏をさすときには、とくに八戸南部と称することとする。しかし、寛文五年（一六六五）に盛岡南部が分裂して、新たに二万石の八戸藩が成立しているので、それと紛らわしいときには新八戸藩を後南部と称することとする。

南部氏が糠部郡を支配するようになったことについては、どうも釈然としない。すでに述べたように、南部家の所伝では、文治五年（一一八九）の藤原泰衡討伐軍に参加し、その功によって糠部五郎をもらったといっているが、それを証する根本資料は一つもない。同事件の第一資料である『吾妻鏡』



南部師行銅像 青森県八戸市・八戸市立博物館

阿曾沼六郎太郎、安保刑部丞実光、安東平次郎兵衛尉」がこれで、鎌倉中期の奥羽に配置された鎌倉御家人の名が知られる。この人々がだいたい吉野朝期までつづき、建武の改革をめぐって南北両党に分かれて紛争している。その紛争に現われてくる人々を現存する根本資料のみから確認すると、

津軽に曾我、比内に浅利、秋田に秋田、五戸に三浦、八戸に工藤三郎兵衛尉、三戸に横溝新五郎入道、糠部郡南門に横溝六郎三郎入道浄内、七戸に工藤右近将監、三戸に会田四郎三郎、九戸に北条氏一族、久慈郡に信濃前司入道行珍、閉伊郡大沢に石見左近大夫、宮古に閉伊十郎左衛門光頼、遠野に阿曾沼下野権守朝綱、一戸に工藤左衛門入道、北郡の宇曾利に秋田城之介の分地、志和郡に斯波・川村、和賀郡に和賀一族、稗貫郡に稗貫一族

戸に工藤左衛門入道、北郡の宇曾利に秋田城之介の分地、志和郡に斯波・川村、和賀郡に和賀一族、稗貫郡に稗貫一族
 がいたことになる。しかし、八戸南部の祖師行が、国司北畠顕家の目代として糠部を支配するまでは、糠部郡内に南部氏の所領は見えない。おそらく、南部氏が糠部郡内に所領をもつようになったのは、建武二年（一二三五）三月十日に、北畠顕家が尾張弾正左衛門尉に命じて、外浜内摩部郷、泉田・湖方・

中沢・真板・佐比内・中目などを師行およびその一族に給与したのが初めであろう。その一族の中に、本家筋の南部氏も含まれるかどうかは明らかでない。この頃、南部の一族がどのくらいいたかということもはっきりしない。紀州熊野の「米良文書」の貞和五年（一二四九）十二月九日付の文書に、

ぬか（糠部）のふの内、九かんのへ（戸）よりまゐり候。たんなはみなく当坊へ参るべく候。又一のへのいつつかたいの中務殿も御参詣候。

とあり、南部信直の母の出た一方井氏が、すでに吉野朝期に一戸の豪族であったことを示している。同じ文書の天文七年（一五三八）七月十一日付のものには、

奥州一戸住人

安倍丹後守、工藤名宮如、とき名宮如

南部与九郎、畠山式部、工藤弥八

おい田大炊助、先達、京今熊野ぶせん

とあり、このうち南部与九郎を長牛与九郎政武に比定すると、与九郎は永禄十一年（二五六八）に秋田愛季との戦いで戦死している。畠山式部は浄法寺村にいた畠山氏で、後の浄法寺修理の先祖と推定される。おい田大炊助を太田大炊助とすれば、康正年中（一四五五〜五七）の蛸崎藏人事件（後述）の功労者と推定することができる。

なぜ、このような言い方をしなければならないかという点、南部家の古記録は第二十四代晴政の代、天文八年（一五三九）に三戸城が放火され、それまでの一切の古記録を焼失したといわれ、さらに寛